

V 寺 院 の 調 査

① 薬師寺の調査

i) 東僧房北方の調査

薬師寺伽藍整備工事にともなって、摩利支天堂が西塔跡西方から、現売札所の東方に移築されることになり、移築予定地の発掘調査を行なった。調査期間は昭和52年11月14日から26日まで、調査面積は約 120 m²である。

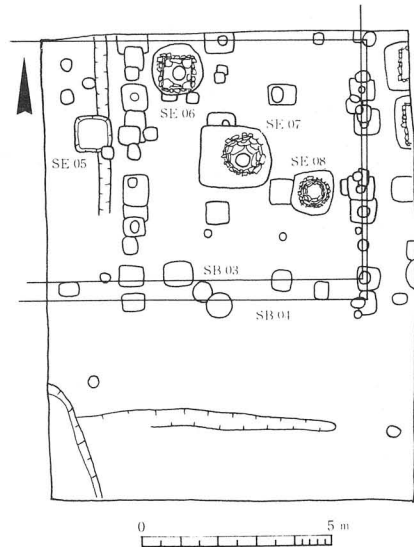
調査地区では約50cmの盛土整地下の旧水田耕作土直下から、多量の土器片を包含する土壌・小穴群を検出した。さらに厚さ約8cmの整地層を除いた地山面から、掘立柱建物2棟、井戸4基、溝2条などの遺構を検出した。

1 遺 構

掘立柱建物 SB03・04は、発掘区の西に延びる昭和40年調査の旧トレンチに続いて、東西棟になるが、未調査地区にかかる部分が多いために平面形式は明らかでない。2棟とも奈良時代に属する。東僧房の北約50mにあり、食堂にも近く、厨屋関係の建物と思われる。

井戸 SE 06・07・08は発掘区西端にかかる既検出の2基の井戸とともに、いずれも瓦積みで、底に曲物を据えている。出土土器形式によると、12世紀前半から後半にかけて、短期間に使われた井戸と思われる。

井戸 SE05 は当発掘区では最も古い遺構で、方約1m、深さ約1.7m。井戸枠は遺存せず、瓦・土器・木器・木筒等多量の遺物を出土した。「霊亀二年」の紀年木筒を出土して、井戸の廃絶時期が分り、また、多量の出土瓦はすべて本薬師寺式であることから、薬師寺の造営工事にかかわる井戸であったと推定される。



第16図 東僧房北方調査遺構図

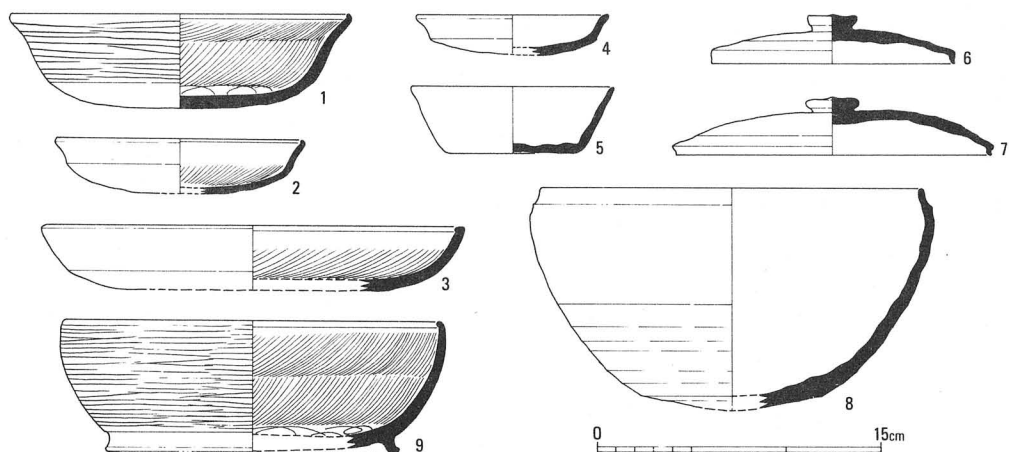
2 遺物

木簡は 233 点（削片 169 点）をかぞえ、原型をとどめる木簡は数点のみである。長方形の木片に千字文の習書と「靈龜二年」の年紀をもつものを含め、同年の木簡が 3 点出土している。全体として習書の木簡が多いのが特徴で、人顔を描いたものや、「靈」の文字ともに亀の絵を墨書したものもある。

SE05 出土土師器には杯 A・皿 A・皿 C・鉢・甕がある。杯 A には底部内面に螺旋暗文・口縁部外面をヘラ磨きしたもの（1）と、底部に螺旋暗文・口縁部に 1 段の斜放射暗文を施したもの（2）がある。皿 A（3）は螺旋暗文と 1 段の斜放射暗文を施し、「長集師」「罪」「證」の墨書がある。皿 C（4）は灯明皿である。鉢は平らな底部をもち、口縁部が内彎して内面に螺旋暗文を施す。甕には大型と小型があり、大型に把手がつく。体部外面をハケメ、内面をなでしあげとする。小型品には内外ともなでしあげたものがあり、「奈戸」の墨書がある。

須恵器には杯 A・杯 B 蓋・鉢 A・水瓶・甕がある。杯 A（5）は底部外面をヘラ削りで調整する。杯 B 蓋（6・7）の多くは転用硯である。鉢 A（8）は鉄鉢形の器で、底部はヘラ削りの平底である。

黒色土器には高台付の杯（9）がある。口縁部は内彎し、端部を内側へ巻き込み、2 段の斜放射暗文と、外面に密なヘラ磨きがある。内面のみ黒色を呈し、底部に螺旋暗文がある。



第17図 井戸 SE05 出土土器（1～3 須恵器、4～8 土師器、9 黒色土器）

ii) 西小子房・十字廊（食殿）地区の調査

今回の調査は伽藍の復原とその変遷を明らかにするとともに、境内整備計画の資料を得る目的で、薬師寺が調査主体となり、当研究所が調査を行なった。調査地は西小子房地区と十字廊（食殿）地区である。

1 遺 構

西小子房地区 西小子房は昭和49年に当研究所が行なった西僧房の調査で一部検出し、その位置・規模を明らかにしている。今回は小子房の間取りを明らかにするため、前回の発掘区に接した北側で発掘調査を行い、西小子房の1房東側・3・4・5房、北側の雨落溝、土壇等を検出した。

小子房基壇は青灰色粘質土の地山上に黄褐色土を約20cm積み上げ構築している。基壇の西南側は中世に沼地となった時期があり、かなり破壊されていたが、東北側は焼土・木炭・瓦で厚く覆われ、比較的良く残っていた。今回の調査で西小子房は2度火災にあっていることが明らかとなった。最初の焼亡後再建されているが、2回目の焼亡で廃棄されている。再建前の各房は桁行2間（20尺）、梁行2間（14尺）で、壁で仕切られ、各房の北半はさらに東西2室に分割されている。壁の下には平瓦を両側に立て、その間に瓦を重ねた地覆がある。この地覆の中に一定の間隔で石を据えていた。各房の中央柱西側の床下には木樋が南北に通っている。この小子房は焼亡した後に同位置に再建されたが再度火災にあっており、赤く焼けた幅15cmのスサ入り土壁が高さ5cmほど残存していた。各房は壁で仕切られて、第3・4房にはさらに北半を2室に間仕切る壁がある。北壁は以前の地覆より6cmほど北に寄せている。この土壁の下で焼土・木炭を検出した。木樋は作り直され、木樋の底板の上に瓦破片を詰め盲暗渠にしていた。この掘形中に焼土・木炭・土器が混入している。

後者の火災は3房床面出土の土器の年代より10世紀後半と考えられる。これは昭和49年の西僧房の発掘調査の所見と一致し、「薬師寺縁起」にみえる天禄4年（973）の火災に比定できる。

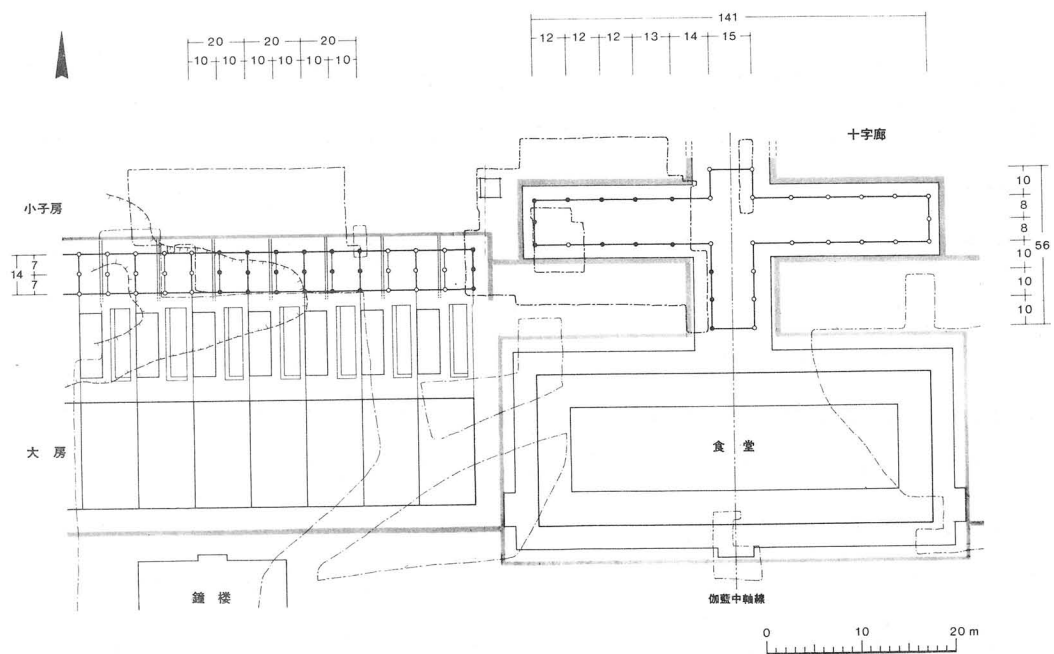
小子房の北側柱より1.5mに堰板を両側に立て杭で押えた幅40cmの雨落溝がある。

この溝には焼土・木炭等を含んでいず、出土遺物・土層より天禄4年の焼亡後に作り直されたことが明らかとなった。この雨落溝の北側には建物はなく、土壌が6箇所散在していた。いずれも瓦溜である。

十字廊（食殿）地区 十字廊は「薬師寺縁起」によれば東西14丈1尺、南北5丈6尺と記載され、他の堂宇の規模の記載方法との相違から平面十字形の建物であり、かつ天禄4年（973）の火災の失火元にあたり、他の堂宇の類焼状況から考え、食堂の後方にあると推定されてきた。今回はこの十字廊の西半分で発掘調査を行ない十字廊・雨落溝・井戸・土壌等を検出した。

十字廊の基壇は後世に攪乱をうけており、礎石が抜き取られたり、土壌が掘られたりしていたが、良く残っていた。十字廊基壇は掘り込み地業をせず、青灰色粘質土の地山上に茶褐色の山土を30cmほど積み上げ、凝灰岩の羽目石を地山に直接立て基壇化粧をしている。石は伽藍中軸線の西4mで鉤の手に南・北に延びている。十字廊は前回調査した食堂と西側柱筋をそろえているので、十字廊と食堂は伽藍中軸線に対称の建物で、桁行が同じであることが明らかとなった。礎石据えつけ痕跡をもとに復原した十字廊の桁行は11間で、柱間寸法は、中央間15尺・脇間14尺・次間13尺・端3間各12尺となる。梁行は2間、8尺等間である。さらに中央間の柱にあわせて、南に3間（10尺等間）分延びている。北にも基壇が張り出しているので、中央間より北にも建物が続くことは明らかで、十字廊が「縁起」記載の十字形の建物であることが確認された。「縁起」にみえる十字廊南北5丈6尺からすると、北への張り出しは10尺と推定される。十字廊基壇の西・南に接して幅50cmの雨落溝がめぐっている。また中央間より南に延びる基壇の西20cmには食堂より続く幅40cmの雨落溝が通っている。基壇に掘られた土壌から出土した遺物の年代より、十字廊は平安時代末には廃絶していたと考えられる。

十字廊基壇の西北部に井戸がある。井戸の掘形西端に内法2mの井籠組の井戸枠を据えている。この井戸内より奈良時代中頃の土器が出土した。基壇およびその周辺に土壌が散在していた。いずれも瓦溜である。



第18図 薬師寺小子房・十字廊（食殿）復原図

(単位は尺)



第19図 薬師寺十字廊（食殿）西から

2 遺 物

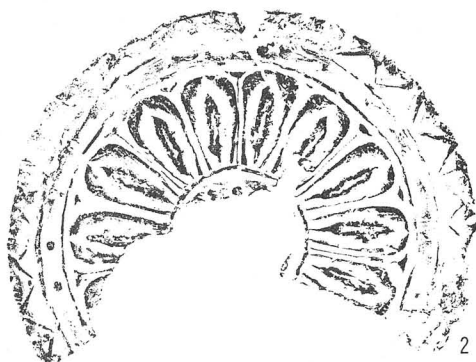
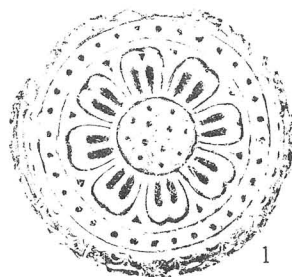
西小子房・十字廊両地区から出土した遺物には多量の瓦のほかに土器・金属製品などがある。

瓦 最も多く出土した軒瓦は、平安時代以降の瓦をのぞき、西僧房の場合と同じく、軒丸瓦6276と軒平瓦6641の両者である。奈良時代の瓦としては他に、軒丸瓦6282・6291・6304・6307・6314の5型式が、軒平瓦6663・6664・6671・6691・6702・6763の6型式が出土しているが、出土量は少ない。このほかに新型式の瓦

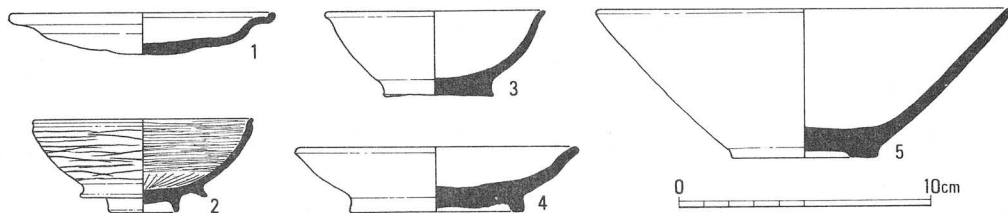
(第20図)が出土した。特に軒丸瓦2は直径30.5cmで特別大型である。以上の瓦のほかに十字廊基壇に掘られた中世の土壇から長方形の緑釉槿先瓦が数点出土した。

土器 土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・緑釉陶器・二彩鉄鉢・灰釉陶器・中国製の磁器等が出土した。この中で最も出土量が多いのは土師器である。井戸中より出土した奈良時代中頃の甕の一つには墨書「三寶」「人足」がある。これらのほかに蹄脚硯・灰釉の宝珠硯等も出土している。

金属製品 銅線を渦巻状に巻き上げた螺髪、銅製の蝶番、鉄釘、白銅製の箸、金箔が各1点出土している。



第20図 十字廊地区出土瓦(1/5)



第21図 小子房・十字廊地区出土土器(1土師器、2黒色土器、3・4緑釉陶器、5青磁)

iii) 南大門の調査

本調査は、奈良市の水道管取換え工事に伴う立会調査である。この工事によって、現南門基壇南側が道路沿いに幅約70cm深さ1.4m掘削された。これは、旧南大門の南側柱の北側に位置する。この基壇部分について調査した。

基壇は掘込み地業をしておらず、現地表面から約1.6m下にある青灰色粘土の地山の上に、砂質土と粘質土を積み重ねて構築されていた。この工法は版築とはいいがたい。積土は、地山面から約1.35m残存していた。

基壇東・西端の基壇化粧の上半部は、既に失なわれていたが、延石が残存していた。この延石は幅約41cmで、延石外面東西間距離は約34.3mであった。延石の位置は、伽藍中軸線に対してほぼ対称である。また、西側の延石上に地覆石の痕跡が認められた。なお、旧南大門中央間の南側西寄りの柱掘形（幅約1.7m）を検出した。この掘形埋土中には炭化物が混っていた。

② 法隆寺西大門脇の調査

法隆寺西南院北面築地の西端近くで、家屋撤去に伴う事前調査を行なった。

検出した遺構は築地3条・溝1条・井戸1基で、4時期に区分できる。第1期は現存築地より西でやや南に振れる。築地(幅0.9m以上)とこれと平行する南の雨落溝(幅0.5m、深さ0.2m)がつくられた時期である。築地は地山を削って基部をつくり出している。その下端から雨落溝までの間(犬走り)は幅1.0mで、西に高くなっている。築地も本来西面大垣寄りで高くなっていたのであろう。溝埋土からは鎌倉時代の瓦器碗が出土している。第2期は溝の埋没後に井戸が設けられた時期である。調査区の東南隅の掘形の一部を検出したのみで詳細は明らかでない。井戸埋土からは室町時代の軒瓦が出土している。第3期は井戸埋没後に東西築地に取付く南北築地(西面大垣地覆石東面から約9m)が設けられた時期である。地覆石は人頭大の川原石を幅0.7m2列に並べたもので、南にやや降っている。第4期は全面に厚さ0.3mの整地を行ない、現存築地と同じ方位の東西築地が設けられた時期である。地覆石は割石を用いたもので、現存築地と一体のものと考えられる。時期は整地土から出土した軒瓦などから江戸時代に比定できる。